

---

# いのち

ポポ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
いのち

【Nコード】  
N0880B

【作者名】  
ポポ

【あらすじ】  
ずっと孤独で死にたいと思っていた少女の話。

## 0話 プロローグ（前書き）

このお話は全て私が本当に経験した事です。もしかしたら、感情移入し過ぎて自分本意な発言もあるかも知れませんが、ご了承ください。  
願います。

## 0話 プロローグ

それは

いつの事だったかな。

たしか小学3年生の頃。

お母さんに

「あんななんか産まなきゃ良かった」と言われた。

あの日初めて死にたいと思った。

自分の部屋の机の引き出しから、図工で使うカッターを取り出した。  
赤いカッター。

右手に握りしめた。

左手首にあてた。

ここを切ったら、死ねるのかな。死んだらお母さんは喜ぶのかな。

手が震えた。

心臓がドクドクと鳴っているのを感じた。  
カッターを握る手に力が入った。

怖かった。

怖くて死ねなかった。

## 1話 わたし

昭和62年、4月4日。

桜が満開の日に私は生まれた。

幼い頃はすれ違う人々が振り返るくらい可愛かったと母は言う。

S県K市で生まれ、その後、父の仕事の都合でS県内を転々と引っ越した。

そして小学3年生の秋、S県から遠く離れたA県に越した。

家族は父、母、姉。

頑固な父。

ヒステリックな母。

猫かぶりな姉。

母は私にそっくりだった。いや、きっと正確には私が母に似たんだけだ。母と私が衝突するのはしょっちゅうで、私は母を嫌っていたし、母も私を嫌っていただろう。

頭脳は父に似て、成績優秀だった。正直、自分に自信があったし勉強出来ない者を見下していた。自信過剰で我が儘だった。

それだけではなく、割と都会に近いS県に住んでいた私は、地方にあるA県を馬鹿にし、そこに住む人々をも馬鹿にしていた。自分が1番だと思って居た。

だって優秀なら父も母も喜ぶから。

「産まなきゃ良かった」

なんて言われないだろうから。

いつしかそう思うようになっていた。

周りと同じは嫌だった。

「自分だけ」

が好きだった。自分だけが優秀。

自分だけが可愛い。

自分だけが偉い。

そうじゃないといけない気がした。

中学生になって初めて制服を着た。

みんな同じ格好。

それを見ただけで吐き気がした。

「みんな同じ」

の光景になれるまで1ヶ月はかった。

そんな私は中学校で有名になった。

いい意味でも、悪い意味でも。

いい意味では、成績優秀な為、先生達には評判だった。姉も同じ中学を卒業し、有名な進学校に入学していたから、それに続けとばかりに期待されていた。

だから、スカートが短くても授業中に寝ていても大して注意を受けなかった。

悪い意味では、態度が悪い。偉そうだと先輩に目を付けられた事だ。もともと方言のあるA県で標準語の私は都会ぶつてると思われがちだったが、更に心では周りを見下して居た為、それが伝わったのだろ。

直ぐさま皆に広がり、多くの先輩に嫌われた。廊下で会う度に

「死ね」

と言われた。

呼び出しも何度となくされた。

しかし負けず嫌いな私は無視して学校に通った。

時には先輩相手に言い返したりもした。

自分は悪くない。

みんなきつと私が優秀だから妬んでるんだ。本気でそう思ってた。

でも

2年生になってクラス替えがあつた。

私を嫌う先輩と仲のいい不良達が同じクラスになった。

虐めの始まりだ。

## 2話 いじめ

クラスにはいくつかのグループがあった。

そのグループの中でも1番権力があるのが、

その不良の居るグループだった。

中でも尚子と翔平の2人は特に私を嫌って居た。

そして、その2人が学年を仕切る不良だった。

この2人に嫌われるという事は学年のみんなに嫌われたのと同じような事だ。

なぜかって？

みんなこの2人を恐れて私と関わらないからだ。

教室では1日中、悪口を言われた。

ゴミや画鋏を投げ付けられた。

私物は破壊され、机がない事もあった。

ある日の事。

風邪で3日休み、久々に登校した私。

その日はなんだか様子が違った。

いつもはまるで私が透明人間かのように無視するクラスメイト達が仕切りに私の様子をちらちらと伺っている。

いつも遅刻してくる不良達は、まだ登校していない。

何だろう？

不意に悪寒が走った。

この雰囲気

嫌な予感がする。

するとクラスメイトの1人が言った。

「ねえ、帰った方がいいんじゃない？中川さんが休んでる時に尚子

ちゃん達が言ってたんだけど」

「辞めなよ！バラしたら許さないって言われたじゃん！」

他の1人が止めに入る。

「でも」

「何？お願い話して！早く！」

冷や汗が出てくる

「うん。なんか、先輩達も集めて中川さんの事ボコるって言ってたの。」

「え。」

血の気が引くのが自分でも分かった。

体が宙に浮いている感覚がした。心臓の音だけが聞こえる。逃げなくちゃ。

学校を飛び出そうとして、先生に捕まった。

こんな時に！

黙り込んで居る私を見て、先生は無理矢理、指導室に連れて行った。

「どうしたの？」

尋ねてくる。

言ったらどうにかしてくれるだろうか？

でも、私が虐められてる事などつくに知っているのではないか？

大人は信用出来ない。

だって実の母親でさえ、娘を突き放すのだから。

「応えなさい。」

どうやら言うしかなさそうだった。

私は全てを話した。

先生は

「本人にも話を聞く」

と言って、止める私の意見など無視して尚子を指導室に呼び出した。ずっと私を睨み続ける尚子。

素直に虐めを認める筈もなく。

「はあ？つーが大袈裟じゃん。あたし何もしてないし。マヂうざい。」

それを聞いた先生は

「そっか。ごめんね。中川さんの勘違いかな？中川さんもあんまり思い詰めないで。尚子ちゃんもそんなつもりじゃないみたいだよ。」とだけ言って、終わらせた。

信じられない。

その後、虐めがヒートアップした事は言うまでもない。  
そして私は学校に行かなくなった。

人間なんて信じられない。この間まで友達だと思って居た子が次の日には他人のふりをする。

何度、死ねと言われただろう。

「あんななんか産まなきゃ良かった。」

「死ね。」

「消えろ。」

みんなが私をいらないと言う。

それから私は部屋に引きこもり、毎日毎日、虐めの本を読んだ。  
自殺した子。

たくさん居るんだ。

どうしたら死ねるのか、毎日そればかり考えた。

そんな日々が続いたある日、父の仕事の都合でS県に戻る事になった。

しかし、姉が高校を転校するのを嫌がったのと、私と母の中が険悪だった事もあり、姉が高校を卒業するまで父と私の2人で住む事になった。

### 3話 うんめい

新しい中学校。

誰も私を知らない。

お母さんも居ない。

これならやり直せる気がした。

全く違う自分に生まれ変わろうと思った。

今までの自分を殺してしまおう。

そうして迎えた新しい学校生活。

本音は言わない。

裏切られるから。

いつも明るく笑ってればいい。

全ては順調だった。

友達も出来た。

楽になった。

でも、どこかいつも不安だった。本音を語らない自分。偽りの自分。孤独だった。

そんな時、引越してから通い出した個別塾で1人の男と出会った。

3歳年上の高校3年生。

その綺麗な顔立ちに目を奪われた。彼はあまりの格好良さに塾でも有名だった。

名前も知らない彼に人知れず憧れを抱いた。

彼の存在を知ってから3ヶ月程過ぎた時、1つ年下の後輩あいから、思いもよらぬ事を言われた。

「あの人、一行って言うんだけど好きなんでしょう？私の友達があの人と友達だから、メール出来るように頼んであげる！」

青天のへきれきだった。

ずっと遠い世界の人だと思って居たのに

メールが出来る？

信じられない。

次の日の朝。

目覚めてすぐに携帯を見ると、あいからメールが来ていた。

「一行さんがメールしてだって！」

そして最後にメールアドレス。

嬉しさのあまり興奮して部屋中を歩き回った。

なんて送ろう？

体が熱くなつていくのを感じた。

こんな嬉しい事は初めてかもしれない。

9月21日。

それは私にとって運命の日となった。

#### 4話 はっこい

それから一行と朝から晩まで毎日メールをした。  
他愛のない話。

内容なんてなんでも良かった。

メール出来るだけでいい。本当に信じられなかった。あんな素敵な人と自分がメールをしているなんて。

違う人なのでは？

とも思ったりした。

メールを始めて1週間。

遂に会う事になった。

塾では話した事がないし、一行は私を知らない。

だからお互いを認識して会うのは、これが初めてだった。

駅で待ち合わせて、映画を観に行く事にした。

どうしたらいいか友達にたくさん相談した。

中でも麻実には毎日相談した。麻実は小学5・6年とクラスが同じだった。

中学は別々だったし、小学生の時も大して仲良くなかったのだが、私がS県に越してからなぜかメールをするようになり、仲良くなった。

もちろん麻実はA県に住んでいるから会う事はなく、専らメールや電話で相談していた。

この頃から、自分でも気付かずに人を信用するようになったのだ。  
でなければ、相談なんてしないだろう。

一行と出会った事で、私は自然と人を信用するようになり、孤独が薄れていった気がする。

一行と映画を見に行つた帰り、私は一行に告白した。

早いとは思つたが、言わずにはいられなかった。その場では返事を聞けず、保留になつたが、

その1週間後にメールでふられた。

「俺には勿体ないくらい純粹だから、俺と居て汚れて欲しくないんだ。だから付き合えない。ごめんね。」

それでも私は諦めなかった。少しでも可能性があるなら

「付き合えなくても、友達として傍に居させて。」

そう言つて、私達は友達として今までと変わらず毎日メールをした。父親の居ない時間帯を狙つて、家に呼ぶ事もしばしばあった。

周りの目が気になる為、塾ではお互い他人のふりをしていた。

知つて居るのは、私と一行。そして、あいとあいの友達。それから私の担当の先生。

先生には塾に行く度に一行の話をした。

個別塾だから、先生と1対1の授業でずっと一行の話ばかりした。

いつからか勉強など全くしなくなった。

先生に一行との事を話すのが楽しくて仕方なかった。

浮かれていたのだ。一行は優しかった。

いつでも傍に居てくれる。寂しさを消してくれる。

私が

「寂しい」

と言えば励まし、

「頑張る」

と言えば応援してくれた。

誰にも言つた事のない

母との事も相談した。

「産まなきゃよかったなんて、きっと本当に思つてる筈ないよ。大

丈夫だよ。俺だつて親父と仲悪い時とかあつたけど、今は仲直りしたし。いつでも話聞いてやるからさ。安心しろよ。」  
彼無しでは生きれなくなっていた。

その日は突然訪れた。

「もう連絡取るの辞めよう。」

唐突なメールだった。

「どうして？」

手が震えて上手く文字が打てない。

「おまえさ、俺が塾で何言われてるか知ってる？」

「え。知らない。」

返事が返つて来るまで、待ち切れない。

緊張のあまり吐き気がする。

「おまえ、担当の教師に話したつしょ？そのせいであの女、俺に色々文句言つてくんの。おまえが勉強しなくなったのも俺のせいだつて。あの女さ、俺の担当の教師にフラれたからつてその腹いせに生徒の俺にやつ当たりしてくんだよね。はつきり言つてもう、うんざり。」

今までとは、違う人みたいな一行。

正直、怖かった。

「ごめんなさい。一行との事が嬉しくて誰かに話したくて我慢出来なかったの。もう誰にも話さないし、担当も変えてもらうから許して！お願い！」

彼が居なくなるなんて考えられない。

嫌だ。嫌だ。

あの先生 何考えてるの？信じられない！

私は直ぐさま塾に行き、塾の責任者の室長を呼び出した。

「あの先生の担当はずして下さい！」

単刀直入にそう言い、一方的に話を終えた。

大分、気が動転していたのだ。

家に帰ると怖い顔をした父が待っていた。

「今までどこに居た？」

「塾だよ。」

「一体、塾で何があったんだ？室長から電話で聞いたぞ。」

その時やつと目が覚めた。まさか親に伝わるなどと考えても居なかった。

でも、そんなのよく考えれば当たり前だ。

親に伝えない方がおかしい。上手い言い訳も見付からないまま、父に全てを打ち明けた。

理解して貰えないかも知れないが、彼の事を隠すのは嫌だった。

悪い事してる訳でもないのに嘘なんてつきたくない。悪いのは先生だ。

「おまえは塾に何しに行ってるんだ？人が稼いだ金で塾に通わせて貰ってるのが分からないのか？それで受験失敗したら意味ないだろ！家は偏差値60以下なんて認めないからな！恥ずかしい。」

父にとっては

先生が悪いが悪くはないかなんて、

私にとって一行がどうゆう存在かなんて、

どうでもいいのだ。

いい学校に受ければそれでいいのだ。

呆れた。

だからうちの親は嫌いだ。いくら頭がよくたって意味なんてない。

優秀であっても虐められたらどうしようも出来ないなら、優秀である意味もない。

もつと大切なものがある筈だ。一行はそれを私に教えてくれた。

「私、高校なんか行かない！あんたの言う通りになんてしないから。」

つい口から出た言葉。

その瞬間。

私の体は床に叩き付けられた。

そう。キレた父が私をけり飛ばしたのだ。

倒れ込んだ私にまたがり、頬を何度もビンタし、お腹を目掛けて何度も蹴った。何度も、何度も。

あまりの恐怖に声も出なかった。

父の動きが止まった一瞬の隙について走って逃げた。

本当に殺されると思った。

## 5話 おやゆび

夢中で逃げた。

顔がジンジンする。

軽い吐き気もするが、止まる訳には行かなかった。

後ろを振り返った。

父は追い掛けて来て居ない。

ほっとして足を止めた。

外は日が落ち、夜が訪れようとしていた。

急いで出てきたから上着などある筈もなく、寒さに体が震えた。  
涙が頬をつたって落ちた。

手に握り締めた携帯が鳴った。あの状況でも携帯だけは持ってきた。  
一行と繋がる手段はこれしかないから。

電話の相手は一行だった。また緊張が走る。

「もしもし？」

声がひきつる。

上手く話せない。

「泣いてるの？」

「うん。」

「何があった？」

いつもの優しい声だ。

良かった。

安心したら余計泣けて来た。

泣きながらも懸命に説明した。

「はっ？何それ。親父、最低じゃん。おまえ大丈夫？おまえは何も悪くない。悪いのは親父だ。」

そうだ。

私は悪くない。

一行が分かってくれるならそれでいい。

他には何もいらぬ。

一行だけ。

一行さえ居ればいい。

家に帰ったら父は居なかった。

私は自分の部屋に籠った。ひどい顔。

痛みは大分ひいたが、腫れがひどかった。

寝ればよくなるだろう。

すぐに眠った。

次の日、目が覚めると左手の親指に違和感を感じた。

痛いような。

変な感じ。

まあ、放っとけば治るだろう。幸い、それ以外の場所はなんともなかった。

あれだけ蹴られても平気なんて、結構頑丈だ。

父とは顔を合わせたが無言だった。

目を合わせる事も無く、1週間が過ぎた。

1週間経っても親指の違和感は消えなかった。

病院に行きたかったが、保険証がどこにあるか分からないしお金もない。

父に言うしかなかった。

「病院行くから。保険証とお金。」

「分かった。」

1週間ぶりに交わした会話はそれだった。父は理由も聞かずに保険証とお金を差し出した。

突き指だろう。

そう思い込んで、診察室に入った。

医者に左手の親指に違和感があると伝える。

すぐにレントゲンを取った。

レントゲンを見た医者が顔色を変えた。

「今日、お家の人、誰か来れる？」

一瞬で不安が押し寄せて来る。

あの時と一緒にだ。

虐められて居た時。

3日ぶりに登校してあの言葉を聞いた時の恐怖。

「なんで ですか？」

「ここ 分かる？」

医者はレントゲンを指差した。

「ここ、小さい白い三角形があるでしょ？これはここが空洞になってるって事なんだ。ここには元々、軟骨があっただけどそれが取れてしまったんだ。だから開いて軟骨を元に戻して針金で固定しなくちゃならない。」

説明を聞くだけで寒気がした。

今まで手術なんてした事ない。

「それで？動くようになるんですか？」

「うーん。なんとも言えないけど、リハビリは必要だね。でもどうして怪我したの？普通、軟骨が取れたりなんてしないよ。」

私は返答に困った。

ここで父に殴られたと言ったら、どうなるんだろうか。

虐待で捕まるんだろうか。

「自転車乗ってて転んだんです。」  
私は真実を言わなかった。大事になるのは嫌だった。これ以上、面倒な事になりたくない。

しばらくして父が病院に着き、私はこのまま入院する事になった。  
手術は明日。

「すぐ来てくれるなんて優しいお父さんね。」

看護師は口々にそう言った。

言われる度に腹がたつ。医者に説明を受けて、父が最初に発した台詞は

「受験に影響が出たら困ります。」  
だった。

私の体の心配など、どうでもいいのだ。

本来なら軟骨を固定する為に入れる針金は、軟骨がくっついたら抜くのだが、抜く時期が受験と重なる為に受験が終わるまで抜かない事になった。

あまり長い間、入れておくのはよくないと医者は渋ったが、父が押し通した。

私はもう何も言わなかった。

どうでもよくなったのだ。手術は全身麻酔を使って行われた。

たかだか親指1本の為に大袈裟だと思った。

しかし、そのおかげで手術中は意識がなかったので私としては楽だった。

目が覚めたらベッドの上で全て終わっていた。

麻酔のせいで体がだるい。意識も朦朧としていた。

どうして、こんな所に居るのだろう。

どうして、こんな事になったんだろう。1人、ベッドの上で泣いた。  
病院の夜は、寂しかった。

次の日、父とタクシーで家に帰った。

タクシーの中で

「お腹減った。何か食べたい。」

と言ったが

「そんな金はない。」

と言われた。

父はずっと眉間にしわをよせている。

その顔を見るだけで苛々する。

指は痛むし、こうなったのも全て父のせいなのに。

ムカつく。

早く一行に会いたい。

それから暫くは家で安静にしていた。学校にも塾にも行かなかった。

一行にも会って居ない。

メールだけ毎日した。

父はお金だけを置いて仕事に行った。

1人家で過ごした。

勉強もせず、寝て過ごした。

何にもやる気が出なかった。

一行はあれ以来、会おうとしなかった。

「俺と居てもろくな事がない。」

それが理由だった。

私は必死で否定した。

「そんな事ないよ！一行が居てくれないと、私生きていけない。会

いたいよ。何でもするから！」

それでも一行は会ってくれなかった。

## 6話 やけど

一行と会わないまま1ヶ月が過ぎた。限界だった。

「お願い！なんでもするから、会いたいよ！」  
私は泣きながら電話した。

返って来た応えは意外なものだった。

「いいけどさ、俺金ないんだよね。だから会っても何も出来ないよ。おまえん家はなんか行きづらいし。」

「そんなの私が払うよ。だから会いたい。」

そうして私達はまた会うようになった。

それ以来、いつもお金は私が払う事にした。

一行に言われた訳ではないが、彼に迷惑をかけたくないし、いつも助けて貰ってる分、恩返しがしたかった。

彼の為になにか出来るのが嬉しかった。彼の誕生日には、中学生にとっては高価過ぎる物もプレゼントしたりした。

そうして私達は受験を迎え、

私は第一志望だった公立は落ちた。

滑り止めに受けた私立に入学する事になったが、父の希望の偏差値は越えていた為、何も言われなかった。一行もいくつか大学に受かったが、第一志望の大学には落ちた為、浪人する事になった。

私達の受験は終わった。

父とは何事も無かったかのように暮らしていた。

春になったら、母と姉も一緒に暮らす事になっている。  
母の事は無視すればいい。もう何も不安では無かった。  
一行さえ居れば怖いものなどない気がした。

高校生になつてすぐ、バイトを始めた。

父は猛反対して喧嘩になったが押し切った。

あれ以来、私に弱い。

親指は受験後、無事に針金も抜き、抜糸もしたが動かす事は出来なかった。

でもそんな事どうでもよくなるくらい  
充実した生活を送っていた。

毎日、勉強もせずバイトばかりした。

学校ではすぐに落ちこぼれになった。

成績は最悪だった。

産まれて初めて劣等生の扱いを受けたが、

別に嫌じゃなかった。

逆に気が楽になった。

もう無理する必要もない。

これ以上落ちる事がないなら怖いものはないだろう。

バイト代はほとんど一行に注ぎ込んだ。一行の煙草代、パチンコ代、食事代。

始めは遠慮していた一行も、今はそれが当たり前になり、欲しい物を要求するようになった。

私はなんでも買った。彼の喜ぶ顔を見ると幸せだった。

お金が用意出来ない時は会ってくれなくなった。

「俺はおまえが居なくても構わない。」

何度となくそう言われた。

もう最初の頃の一行はどこにも居なかった。

お金以外の要求もエスカレートした。

メールは5分以内に返さなくてはいけない。

一行からワンコールが来たらすぐに電話しなければいけない。

メールや電話が出来ない状況になる時は事前に報告しなければいけない。

呼ばれたらどこに居ても駆け付けなければいけない。

私の自由は無かったが、私は何も言わなかった。

一行が居なくなるのは嫌だった。

全部言う通りにした。

周りにはみんなおかしいと言ったが、私はそう思わなかった。彼が私を必要としているのが生き甲斐だったから。

麻実だけは応援してくれた。辛い恋愛をして来た彼女だけは理解してくれる。

いつの間にか麻実も私にとってとても大切な存在になっていた。

一行は言った。

「俺、最近おかしいんだ。無性に苛々して。自分を傷付けなくなるんだ。」

彼の左腕には煙草で付けられた火傷がいくつも出来ていた。

私は哀しくなった。

彼の力になってあげたいと思った。

「一行の痛み半分持つてあげる。だから私にも同じ傷、つけて。」

彼がつけた煙草の痕。

愛しい傷。

私は幸せだった。

私は一行そのものだった。彼と同じように、腕を切り、同じ物を持ち、同じ煙草を吸う。

本当に彼を愛してた。

付き合っている訳ではないが、そんな事は問題でなかった。傍に居られるだけでいい。

だらしない一行には、女がたくさん居たが、私程彼を愛している女は居ない自信があった。

学校にはとっくに行かなくなっていた。

周りの心配は聞かないふりをした。

親も呆れてもう何も言わなくなった。

居ない者として扱われた。

でも、そんな一行との関係も長くは続かなかった。

突然、連絡が取れなくなったのだ。

メールの返事も返って来ないし、電話も繋がらない。

考えてみれば私は彼の家も知らないし、携帯が無かったら連絡を取る事は出来ない。

なす術はなかった。

所詮こんなものなのだ。どれだけ彼を好きでも、どれだけ彼の為に頑張っても、所詮、私達はこの程度の繋がりだったのだ。

信じられなかった。この前まで、毎日連絡を取っていたのに。またすぐ連絡が来るだろうと思った。

でも、いくら待っても彼からの連絡は来なかった。

生きる意味を失った私は、何もしなくなった。

1日中ベッドの中で彼からの連絡を待っていた。

そのうち自殺する事を考えた。

いつかの時みたいに。

自殺サイトについて仲間を募ったりもした。

彼が居ないなら生きていても仕方がない。

見兼ねた母が口を開いた。

「あんた学校どーすんの？このままだと留年でしょ？」

「どうでもいい。」

「それだところちが困るのよ！」

「生きていても仕方がない。」

「はあ？だったら死ねば？でも自殺されると迷惑なのよね。親のせいになるし。ご近所さんに何言われるか。ただでさえ恥ずかしい娘なのに。」

これが親の言う台詞だろうか？

心臓が締め付けられて苦しくなった。

息が詰まる。

痛い

「あんたが勝手に産んだんでしょ！私は産まれてきたくなかった！」  
母は気が狂ったかのように泣き出した。  
いつもこうだ。

自分だって酷い事を言うくせに、言い返されると大泣きする。  
まるで産まれたての赤ん坊のように。

そして喚きながら、物を投げ飛ばし、父にすがりつく。

「あの子にひどい事言われたの！どうにかして！」

自分のした事は何も言わず、全て私が悪いと言う。

母は昔私に言った事も何も覚えていない。

「産まなきゃ良かった。」

と言って包丁を突き付けた事も、全て忘れてしまった。

都合の悪い事は頭から削除してしまうのだ。

家には居られない。

私は家を飛び出した。

毎日、友達の家を泊まり歩いた。

朝まで飲み明かした。

酔い潰れて吐くのも日常茶飯事だし、その日会ったばかりの人の家に泊まるのも当たり前だった。

みんなと騒いでいれば、全て忘れられる気がした。

飲む為に毎日バイトもした。

夜まで働いて、その後に飲み会。

そんな日々が続いた。

空っぽな毎日。

深く考えるのは辞めた。

全部どうでもいい。

一行が居ないならなんだって同じ。

季節は夏になろうとしていた。

学校は通信に移る事になった。

高校2年生、17の夏。

好きな物は日本酒と煙草。

優秀なんて2文字は忘れた。

## 7 話 め

そんな日々を送る中、1人の男と仲良くなった。

同じバイト先の2つ年上の男。

坂田太一。

彼はバイトをしながら一人暮らしをしていた。

元々、S県の隣の県に住んで居たのだが、居られなくなって逃げて来たらしい。

元暴走族総長。

どこことなく一行に似ている気がした。

今も火傷の痕を見る度に胸が痛む程、一行の事が好きだった。

半年経っても薄れる事はない。

一行に似ているその男を見ると、一行が居る錯覚がした。あつと言う間に彼が好きになった。

彼も一行に似て、女にだらしかなかった。

毎晩、彼と飲みに行き、彼の家に泊まったが、付き合っている訳じゃなかった。

そのうち、体の関係になった。

「セフレにならない？」

と言われた。

普通はそんな事を言われたら怒るだろう。

でも、私はまた好きな人の傍に居られるなら と、嬉しく思った。

彼は不思議な男だった。

あまり自分の過去について語らない。自分に自信があつて、大きな夢を持っていた。

バイクが好きな彼は、レーサーになる事を夢見ていた。専門の学校に行く為に幾つもバイトをして、お金を貯めていた。

目が輝いてる。

「おまえは？なんかやりたい事ないの？」

「なーんにもないなあ。親には弁護士になれって言われた事あるけどね。」

「親じゃなくて、おまえ自身は？おまえの親、決め付けるなんて駄目だよな。子供の人生は子供のもんなのに。」

真剣な顔してそう言われた。

感動して泣きそうになった。

そして、自分が恥ずかしく思えた。

私、このままじゃ駄目だ。何か見付けなくちゃ。

やりたい事

でもどうやって見付ければいいのか？

「よし！おまえ今、昼はバイトしてないんだろ？紹介するから昼もバイトしない？」

そうして、彼の紹介で昼は飲食店のキッチンをする事になった。

そこは彼がS県に越して来てから、ずっとバイトしている店で、人手が足りないらしい。幾つもバイトをしている彼は、週に2回しかその店には顔を出さない。

それでも2つと同じバイトが出来るなんて、少しは特別な存在になれたのではないかと、胸を躍らせた。

少しでも彼の傍に居たい為に始めたキッチンのバイトだったが、意

外にも自分に合っているようだった。

今まではホールのバイトしかした事がなく、自分にキッチンなんて出来るのだろうかと不安だった。

でも始めてみると、その不安はどこかに消えた。

バイト先の人もみんな優しくて居心地がいい。

中でもキッチンを仕切る小沢チーフは大人で素敵な人。

高校には行かず、16歳でこの仕事を始めたチーフは小さい頃に母親を亡くし、弟の面倒をずっとみてきたが、

若い頃はかなりやんちゃで迷惑もたくさんかけたと言う。

上司と衝突して逃げ出した事もあったらしい。

それでも、この仕事を続けて良かったと。

「若い時は、自分が上手くいかない全部周りのせいにした。それで1度何もかも嫌になって仕事全部放置して逃げたんだ。でも、居場所なんて無くてさ。頭下げて帰って来たよ。てっきりクビにされると思ったけど、頭叩かされただけで許してくれた。それから真面目に働くようになったよ。悪い事も辞めた。俺の居場所はここしかないって。死に物狂いで働いた。それで19歳にはチーフになった。うちの会社はチェーンにしては、そこまで店舗も多くないし小さいかもしれない。正直、辞めていく人も多い。でも俺はここで働いて良かったと思うし、これからこの会社の為に働こうと思う。」

太一と同じだ。

太一と同じ、輝いている目。

「おまえもまだ若いし、色々大変だと思うけど、うちで働いて損はないと思うよ。頑張れよ！」

一行が居なくなってから、いつ死んでもいいと思ってた。

生きていても意味はないけど、死ぬのは怖いから、なんとなく生きているだけ。

生きる事も死ぬ事も出来ない。  
中途半端で格好悪い。

このままじゃ嫌だ。

何か生き甲斐が欲しい。

太一やチーフみたいにな、

あんな

輝く目をして夢を語りたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0880b/>

---

いのち

2011年1月19日12時44分発行